愛知工業大学研究報告
第18号A　昭和58年

ノート

学生相談室報告 (6)

纐　纈　康　兵

Report from the Counseling Room (No.6)

Kohei KOKETSU

The 6th annual report of the counseling room briefly mentions some remarkable points which today's students confront under the difficult circumstances.

学生相談室の報告も年を重ね，今回は6回目である。相談活動の報告なるものを記す時に常に感じることは，訪れる学生が抱えてくる問題が当人にとってどんなに切実な重みをもっているものであるかということを，またカウンセリングのプロセスにおける臨場感というか緊迫感という類のものを言葉を通して第三者に伝達することの困難さである。相談内容そのものは当然秘守されるべきであるから，事務的な報告となるとかえって難しい。これは報告者の筆力のいたらなさばかりに責を負わせる問題とは質を異にするものである。また、カウンセリングを日常の主要な活動のひとつにしている者の一人として意欲を挫かれることは、慎重に，忍耐強く積み重ねていかなくてはならないカウンセリングについて，いとも簡単に多大な理解を示すジェスチャーや現代学生気質について御高説を披瀝される場合である。こうした周囲の理解はたしかに有難いことであるが，あえて不遜を省みずに言わせて頂くならば，「わかる」ということについて微妙なズレを感じる。これはなにも不満として述べているのではなく，かく言う私自身がカウンセラーとして，相談に訪れる学生との関係を考える場合に同様の意識を彼らに与えていないだろうかという自省の思いがあるからである。繊細な感覚の持主であれば一瞬のうちにこうした皮相を見抜くものであり，そうなればカウンセラーなど一介の他人でしかなくなる。なんらかの目的をもって相談室のドアを押す学生は，招き入れたカウンセラーをわずか数分の間に信頼に価するか否か判定しているからである。ピーンと張りつめた空気が漂う場面から信頼への和みが生じるならば，カウンセリングへの導入は比較的スムーズに運ぶ。こうしたことも6年の実践を経てかなり余裕をもって接することができるようになったが，社会の変化はとどまることがなく，それを反映して学生達にも年々微妙な変化があり，その対応に際しては，これで充分とする模範答案はあり得ないのが辛いところである。キザに言えば，常に真剣勝負である。その上，勝敗が明らかになる性質のものではなく，暗澹たる思いにかられる場合すらある。しかし人間に対する信頼を失わない限り，相談活動に対する意欲のバネは弾性を保持することが可能であると確信して今後も努力していきたいと考えている。

以上のような学生との関係を念頭におきつつ，特に，顕著な最近の学生気質について本年度の事例を振返りながら述べてみたい。

1）自我同一性の拡散

ここ数年来，偏差値なるものでがんじがらめにされている受験体制はますます熾烈化している。「学ぶ」ことの楽しさや，「未知の発見」に対する喜びなどはほとんど経験することもなしに，ただ入試のために知識の断片を詰込み，受験技術を習得することの繰返しが今日も明日も続く高校生は，心の奥に満たされないもののあることを無意識に感じているのではないだろうか。一般的に言うと，高校生の心理的特徴として「自我の不確実性」を挙げることができる。自分というものに対して不確かな感じが拭いきれず，自分が何者であるのかを探求する時期である。自らを確かなものとして認知したい「自己確認」あるいは「自己の存在証明」の欲求が強くなってくる。この時期に顕著になる「自己主張」，「自己顕示」，「自己表現」といった行動パターンはこうしたところに起因する。心理的発達の観点からすれば順当に発露されるべきこれらの行動パターンが，現実的には受験とか生活指導という名のもとにおこなわれる学校の厳しい規制によって抑圧されている部分がかなりの比重を占めていると考

えられる。「自己確認」の欲求はこの時期に完全に結実するものではないにしろ，今日の状況では高校生の時期に必要以上に抑えられたまゝ大学生に移行すると見る方が妥当である。

そこで，大学生活に入っても「自分がわからない」という自我拡散の意識が濃厚である。これは，未だに自己のイメージが定まっていないことによるものである。高校時代に受験勉強に追われながらも，心の深奥に空洞があるような寒々とした感じがあったと語ってくれた学生がいたが，学ぶ喜びを体得することなく過した高校生活の内面的貧困さが大学生になっても尾を引いているのである。自己の分析，自己省察，自己との対決など，若者としての当然の心の葛藤が片隅に追いやられたまゝ苛烈な進学競争の戦列につくことを余儀なくされる3年間の高校生活，厳密には中学から連続した6年間という才月の心の空白の軌跡が彼らの内面生活にいかに重大な影を投じているか，現代の学生に接してみるとよく見える。受験体制に組込まれて過した6年という期間の後，突如その囲いを取り払われたとしても途方にくれる者がいるのは無理からぬほどに彼らを締めつけていたものはきつい。明確な自己のイメージが欠如し，拡散した自我のまま規制から自由になると，かえって不安が生じ易く，感情的にも不安定な要素が増大し，意欲減退へと連なることが多い。

2）無目標と画一化

自分というものに対して確たるイメージを描けないことから生じる不安は，とかく自己を多数の中に埋没させようとする方向へと向う。これは，学生の心理や行動がワン・パターン化している傾向の一因であるともいえる。この傾向は，テレビなどを媒体とする高度の情報化社会において情報が広汎に波及することによりさらに増幅されている。自我を確立できずにいる学生達は欲求不満を内在させながら，安易な方向である行動の画一化，没個性という現象を呈する。絶え間なく，一方的に送られてくる膨大な量の情報をキャッチして，理解もしないままに先を見，事象を限定化し，未成熟ながらシニカルで，醒めているというのが標準的な若者像であろうか。大学生の意識調査などをみると，共通している点は「趣味に合った生活」を望む学生が圧倒的に多いことである。これは，一面からいうと決して悪いことではない。しかし，現在の彼らの状況を観察してみるとネガティブな要素が濃く，一種の逃避の形でもあるところが気にかかる。繰返すようであるが，受験戦争の過酷さ，偏差値による一目瞭然の大学格差，序列化が存在する。夢も冒険心も摘み取ってしまう管理された学校教育の線上にあるところの「自分に合う」とされた大学に入る。そこでは，卒業後の社会における自分の序列がすでに見えていると誰もが思ってしまう。さらに，企業社会の過酷さについても多くの情報を通して早くから知っている。となれば大学生活はまさにその狭間にあるわけであり，一種の「アキラメ」が学生の心に蔓延していく。ある評論家が現代を称して「無目標社会」と表現したが，まさに多くの人々にとって人生の目標喪失，将来を予見することが難しい時代に我々はおかれているのであり，大学生も例外ではない。管理化された社会構造，目標を持てない人生，――それならせめて自分の趣味を大切に，のんびりと暮そうではないかということになるが，米国で流行した「ミーイズム」とも相通じる「自分さえよければ……」という傾向になる。こうして自分の美意識に合った生活へと向う若者層にはマス・メデイアを通じて生み出される生活様式や価値感がストレートに浸透している点が興味深い。本来，価値観というものは，各人の思考の結果として出てくるはずであるが，現代の若者のそれは社会の大勢と安易に合致してしまっている。物に不自由のない豊かな社会では必然的な現象でもあろうが，せめて大学生の時期に自我の確立をなし，真に成熟した意味での自己主張，そして問題意識を自覚することができるようになって欲しいと願う。そのためにも充実した学生生活を提供する場として大学が機能すれば，現在のようなワン・パターン化した風潮にもいささか変化が生じるかもしれないとの望みを抱くのではあるが。

3）連帯感の欠如

欲求不満が内在化していると同時に，今日の学生は孤独感を強く内包している。かつてマクルーハンは現代人を「点の存在」として把えているし，ドラッカーは「不連続」という形で把えた。こうした現代人の特性は学生にも如実にあらわれている。某大学の調査によると，「生きがい」を感じている学生はわずか20％にすぎない。また，何事にも受動的で，社会的な関心も薄いとされる現代学生の意識は「倦怠感」という項目該当80％という数字が多くを語っている。これとは別に，大学生協が毎年おこなっている東京の大学生を対象にした「学生生活実態調査」によると，「大学生活の重点をどこにおいているか」の設問に対して，「資格取得」が29％でトップ，続いて「友人との人間関係」26.2％となっている点に注目したい。相談に来る学生の中には，一人の友人もいないというケースがかなりある。流行の服装，車，レジャーなどに同じような関心を示し，社会の出来事にも判で押したように同じ反応を示す多くの若者が内面的な交流を持ちたいと願いながら持てないでいる。群衆として集合し

てはいるが個々にバラバラ，相互のコミュニケーションができないまま孤立している。この「孤独な群衆」（D・リースマン），不連続化という表現は，当の学生達にも切実感のある言葉であると思う。こうしてみると「友人との人間関係」が第2位にあることは，個人を「孤独な群衆」へと追いやっている状況の中で心を分ち合える友人を希求している学生の声が聞えてくるようである。

クラブ活動や同好会に参加して友人に恵まれる学生は問題も少いが，他方には友人や教師との人間的な接触を求めながらも思うようにいかず孤独な思いに悩んでいる学生も多数存在する。こういうタイプの学生の中には，学外の団体，たとえばある種の宗教団体（世界中の若者に働きかけて大きな社会問題にもなった擬似宗教組織）などの誘いに乗じやすい面がある。私が扱ったケースにもこれに類する例がある。比較的早い時点でカウンセリングをおこなえたことが幸いして問題は解決したが，現在でも週に一度は時間を決めて面談を続けている。この定期的面談は本人も希望しているからであるが，友人がいない淋しさが直接の引き金になっていたことを考慮した上での処置である。本学ではこうした極端な例は稀れであるが，友人ができないために勉強も面白くなくなり，次第に無気力になっていくケースが非常に多い点は憂慮すべきである。

4）思考の変化

テレビ，マンガなど映像による影響が強大になった今日の社会においては，これが単なる娯楽の次元にとどまらず，人間の思考にも微妙な変化を及ぼしている。ましてや生まれた時にはテレビが普及しており，学校教育の場においても家庭においても常にテレビと密接に関わりあって成長した現代の学生には，いわゆる水平思考の傾向が強い。テレビ，雑誌などには水平思考に訴えかけるコマーシャルが氾濫している。あらゆる種類の印刷物の見出しやキャッチフレーズにも，これを応用して興味をそそるものが珍しくない昨今である。さらには家庭の中にまで浸入しつつある各種のコンピューター，あるいは産業ロボットの出現とその広汎な採用がもたらすであろう経済・社会構造の質的転換などが否応なしに我々を，とりわけ適応性の高い若年層の考え方を変えていくであろう。思考の変化は，人間の行動や価値感に変化をもたらし，一世代前の人間にとっては理解に苦しむ側面が出てくるのは当然のことである。最近の小学生がいとも簡単にマイコンやパソコンを扱っている光景は，専門家以外の中年族にはまさしく驚異である。さらには，ロボットやＮＣ（数値制御）工作機械，高度のコンピューターなど現代の電子機械が人間の労働意識にどんな影響を及ぼしていくかということ，あるいは遺伝子工学の進歩につれて従来は神秘とされていた生命の領域にも光があてられることによって惹起されるであろうさまざまな問題は哲学や倫理の分野においても回避できない問題を提起するにちがいない。ざっと眺めただけでも，我々の生きている現代は実にすさまじい変革の時代である。従来の学説やイデオロギーなどの尺度では測り得ない現象が続出しているし，今後もあらゆる分野で問題に直面するであろう。

こうした時代的特徴は時代の産物である人間，殊に未来へ向う若者に色濃く反映する。一方では，かつてない質的転換の時代でありながら，他方には，従来の社会構造からさまざまに派生した現象によって一種の閉塞状況におかれているという困難な時代の中で，学生は「生きがい」を模索し，新しい価値観や行動規範を形成していかざるをえない。このような状況を認識した上で，学生と接する立場にいる一カウンセラー，一教師としてはいかなる働きかけをなすべきか。次の時代へと向う若者が参加できる場を共に模索する努力をせねばならないと考える。

付記：過去1年間に学生相談室で扱った相談内容と件数を集計したものが下記の表である。併せて御参照頂きたい。

内容別相談状況

相談内容	件数	%
学業全般（留年，留学などを含む）	126件	25.7%
精神衛生	58件	11.8%
学生生活	199件	40.5%
人間関係（恋愛など）	52件	10.6%
将来（就職など）	43件	8.8%
健康全般	13件	2.6%
計	491件	100%

（昭和57年1月16日～昭和58年1月15日集計）

（受理　昭和58年1月16日）